

『人文学フォーラム』の創刊に寄せて

文学部長 人文学科教授 神野藤 昭夫

跡見学園女子大学は、平成一四二〇〇二年四月に、開学以来の大改革を行った。

本学は、これまで文学部一学部のカレッジであったが、あらたにマネジメント学部を創設し、文学部にもまた、臨床心理学を増設した。そればかりではない。文学部の国文学科・美学美術史学科・英文学科・文学科の四学科を改組統合して、人文学科としたのである。したがって、再開学といってもよい刷新である。

いったい本学は、遠く学祖跡見花蹊が、明治八二八七五年一月八日、神田仲猿楽町十五番地に跡見学校を開設したことに由来する。その時から九〇周年を機に、昭和四〇（一九六五）年、ここ新座の地に、国文学と美学美術史の二学科からなる跡見学園女子大学を開校したのであった。花蹊は、漢学・和学を修めたばかりか、数多くの優れた画業を残した、文人であり、芸術家であり、そしてなによりも優れた見識をもった教育者であった。跡見が両学科から発足したことは、跡見の伝統の継承を強く意識したものであったといつてよい。

跡見学校は、発足のそもそもから、時代の先端を切り開く近代化の象徴ともいべき西洋の学を授けることによって特色を発揮するというより、むしろ、日本の伝統的基盤の上に立って教育を施してゆこうとするところに特色があった。しかし、それはいたずらに保守をこととするのではなく、時流に流されない基盤のうえに、新たな学を授ける柔軟性に富んでいたのもあって、英語教育も早くから取り入れていた。

昭和四二（一九六七）年の英文学科の増設もまた、跡見学校のたどった歴史と符節を合わせるものであったといえよう。

さらに昭和四九（一九七四）年には、文化学科が増設される。当時、文化学科を持った大学は稀であり、少なくとも女子大学では、最初の設置である。確固たる基盤のうえに進取の教育を施そうとする伝統がここにも生かされたことになる。

以来、長く文学部四学科体制を維持してきたのである。その間、大学の『紀要』とは別に、各学科を母体とするところの学術誌として、昭和四八（一九七三）年に『国文学科報』『美学・美術史学科報』『ゆべりにあ』（のちに『跡見英文学』と改称）が創刊され、昭和五八（一九八三）年に『フォーラム』が創刊されて、四学科の学術活動を広く知らしめる成果をあげて、平成一四（二〇〇二）年に至ったのである。

今般、四学科を統合し、人文学科とするに至ったのは、大学が果たすべき社会における役割の変化に対応するところが大きい。古くは最高学府と形容された大学の役割もまた、大学に進学する学生たちの増加によって、現在ではエリートからマスそしてユニバーサル段階に達したといわれる。高齢化社会の到来とともに、生涯学習が説かれ、大学教育もまた生涯学習社会の中に組み込まれることによって、その社会的な役割が変容してきているところである。現在、大学は、専門性の高い知識、教養、技能を身につけ、自己形成を遂げることによって、高度化し、複雑化する社会に柔軟に対応してゆくことのできる学生たちを育てる場であることが求められてきている。

これまでの四学科体制は、初めから確固たる目標を持って専門を学ぼうとする学生たちのためには優れていたが、漠たる関心のもとに入学した学生たちが、しだいに自己の興味のありかを発見し、将来を見据えながら、それを専門的に深めるためには、制度じたいの柔軟性には欠けていたといえよう。

そのような反省が、従来の学科間の垣根をとりはらうだけでなく、さらに多彩な知的広場のなかで、学生たちが自由に遊弋できる領域を構想することに繋がり、人文学科の設立に至ったものである。人文学は、英

語でいえば、Humanitiesである。人間と文化に関する学、それが人文学ということになる。古くは、ルネッサンス期におけるフマニタスに由来し、諸学問の統合するところに人文学なるものがあることになる。

私たちの人文学科もまた、たんにさまざまな専門領域を押し広げて一学科にしたというものであってはならない。学生たちが個々に多様な専門領域を学ぶことをとおして、彼らじしんがHumanityを内部に抱えた存在へと自己確立を遂げてゆくようであつてほしいと願っているのである。

それは、教育にかかわるばかりではない。私たち教員の側にも深くかかわるところであつて、これまでそれぞれの専門的領域のなかで、深くはあるけれどもかく閉鎖的になりがちであつたありかたに対して、私たちがじしんが広い知的広場を共有することに繋がっている。いまいちど、おのれの学問領域を全体性のなかで捉えなおし、あらたな知的ネットワークへと組み上げてゆくような学のありかたを志向するところに、人文学科へと改組したことの深い意義があると考ええる。

本誌『人文学フォーラム』は、これまでの『国文学科報』『美学・美術史学科報』『跡見英文学』『フォーラム』四誌のまさに発展的解消のうえに立って、あらたに発刊されるものである。

跡見の人文学は、私たちのこれからの教育研究活動が、その実質を創りあげてゆくものである。人文学科が自由で闊達な知的広場となること、その象徴が『人文学フォーラム』誌に現れ出るようであつてほしいと願っている。

学生たちにとって、跡見の四年間はその生涯においてかけがえないものである。そして私たち教員にとつても、跡見はかけがえない人生の場である。跡見の人文学が深く豊かで刺激的なものとなるよう、その形成に参画する喜びを共有したいものと思う。